
スマイルプロジェクト ~その笑顔、国家機密につき~

沙 亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマイルプロジェクト ～その笑顔、国家機密につき～

【Nコード】

N3342Y

【作者名】

沙 亜竜

【あらすじ】

炎壁ほのかへあつき熱希と沢湖さわこみなも水萌は親友だ。熱希は水萌を大切に思っている。

熱希はある日、水萌を狙う影に気づく。仲間たちと協力し捕らえることに成功したが、彼らはストーカーなどではなかった。

幼い頃に投与された薬によって、水萌は強力な爆弾と化していた。彼女を爆発から守る国家機密組織スマイルプロジェクト、それが彼らだった。

リーダーのアマサギが言うには、水萌は悲しみや苦しみといった負の感情の蓄積によって爆発してしまうらしい。逆に笑っていれば、

爆発の危険性は抑えられる。

熱希たちは水萌が爆弾だとわかってても、友人として今までどおり接する。そんな中、さらなる怪しい連中が水萌の周りをうろついていくことを知る。

「ううう〜……。ぐすっ」

少女が泣いていた。

あたしの大切な少女が。

「ほらほら、こっちだよ！ほんと、トロいな、おまえ〜！」
「うえ〜ん、かえして、かえしてよお〜……………」

男の子が少女の物と思われる、ピンク色の巾着袋を高々と掲げていた。

それに飛びつこうと必死にジャンプする少女。その動きは男の子の言葉どおり、トロい。

男の子が動かす手の動きにもまったくついていけない。

それでも必死にジャンプする少女の手が、どうにか巾着袋に届く
うとする瞬間、

「ほい、パス！」

男の子は手にしたそれを、他の男の子に投げる。

でも、女の子は必死にジャンプしていたため、勢い余ってその男の子に体当たりする形になった。

「うわっ、いてー！こいつ、ほんとトロいなー！」
「うううう〜……………」

少女はそのまま膝から地面に倒れ込んだ。

どうにか身を起こした少女は、地面ですりむいたのか膝を抱えながら、男の子たちに涙目を向ける。

「ううゝ、かえしてよおゝ、私のたからものおゝ……」

膝をすりむいてケガをしたかもしれないと、ちょっと心配そうな様子を見せていた男の子だったけど、少女の言葉に反応してさらに声を上げた。

「これが、宝物おゝ？ あははは！ おい、その中になが入ってるか、開けてみるよ！」

「OK！」

巾着袋を持っていた男の子が、その紐に指をかける。

「や……やめてよお……！ あけないでよおゝ……」

必死に懇願する少女。紐は固く結ばれていて、なかなか開かないようだった。

「やだやだやだ、あけちゃ、だめえ……！ うえゝゝゝん、ぐすつ」

少女は立ち上がる気力もなくなったのか、近くにいた方の男の子にすがりつきながら泣いている。

「うわっ、くつつくなよ！ 鼻水がつくだろ！」

男の子は身をよじるものの、少女を振りほどくことはできなかった。

初夏で少し暑いからか、男の子がちょっと赤くなっていた。もっとも、暑いからという理由だけじゃないのだろうけど。

ともかくそんな場面に、あたしは現れた。

一緒に帰ろうと約束していたにもかかわらず教室にいなかった彼女を探していたのだ。

「おいこら、あんたたち！ 水萌みなもに、なにしてんのよお〜〜！」

まさに鬼の形相といった感じであたしが怒鳴ると、

「うあ！ 鬼ババが来た！ 逃げろ〜〜〜！」

男の子たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていった。

残ったのは、まだ倒れたまま、ひつくひつくと嗚咽を漏らしている少女と、鬼の形相のままのあたしだけだった。

「水萌！ 大丈夫？」

あたしは少女に駆け寄る。

「ひつくひつく、熱希あつきちゃん、顔、怖いよお〜……ひつく」

ぐしゃぐしゃな泣き顔をさらしながらそんなことを言う水萌。

てか、あんた。そんな言い方をしたら、あたしが泣かしてるみたいじゃないか！

なんて考えていると、案の定というか、クラスメイトが通りかかってしまった。

「おおう！？ 熱希ちゃんが水萌ちゃんを泣かしてる！？ これは

由々しき事態なのだっ！」

……なんでよりもよって、この子が現れるのだから。

この子はフーミン。というと、文子とか史奈とかいった名前を連想するかもしれないけど。この子の名前はそのまま、ふうみん風民という。すずしろふうみん涼城風民、クラスメイトの中でも随一のお喋りな女の子だった。

自ら「フーミンって呼んでほしいのだ」と言っていたのだけど、名前のほうを、しかも呼び捨てにしてということなのだから、考えてみると結構すごいことなのかもしれない。

それにしてもこの子の喋り方は、聞いていてちょっと疲れる。

「フーミン！ 違うってば！ それよりなんで、こんなところに来るのよ!？」

「それはこっちのセリフなのだ。こんな人気ひとけのないところに水萌ちゃんを呼び出して、なにしてたのだ!？」

人気のない場所。うん、確かにそうだ。

ここは中庭。だけど、校庭に出るためにも、校門に向かうためにも、体育館に行くためにも通らない。

花壇があるから世話をしに美化委員が通りかかったりはするかもしれないけど、それ以外の人通りはほとんどない場所だったのだ。

花壇には背丈の高い花も植えられていて、職員室や人の多い教室に近い廊下からは死角となっている。

つまり、あの男の子たちはそれを考慮してこの場所で水萌をいじめていたのだ。

なんて計画的で卑劣な奴らなんだろう。

とはいえ、男子が水萌をいじめるのも、わからなくはない。

だって水萌ってば、こんなに可愛いんだもん。

男の子って好きな女の子をいじめて自分の存在をアピールするよ
うなところがある。

そんなことをしても絶対嫌われるだけだと思うし、ほんとバカだ
なって思うけど。

さっきの男子はきつと、水萌が気になって仕方がないのだろう。
だからといって、いじめていいなんてわけはない。現に水萌は泣
いている。それだけでも充分に罪なのだ。
と、そんなことを熱く考えている場合ではなかった。

「まあ、水萌ちゃんと熱希ちゃんが仲たがいするなんて、考えられ
ないと思うのだけでも……」

目の前ではフーミンが、そうつぶやきながらも状況を把握しよう
としているのか、あたしと水萌へ交互に視線を向けていた。

あたしは水萌を見る。

彼女はまだ泣いていたけど、少しは落ち着いてきているみたいだ。

それでもまだ、ひつくひつくと鼻を鳴らしているのだから、自分
で状況説明ができるはずもなく。

かといって、いじめられていたと正直に話してしまうのもどうか
と思った。

べつに男子を庇うためじゃない。

告げ口したと、さらに水萌がいじめられるかもしれない、そっ
う可能性を考えたのだ。

このときのあたしは小学校三年生だったはずだけど、案外冷静に
考えていたようだ。

「えっと、それは……」

どうしようかな、と思考を巡らせる。そうだ。水萌、さっき膝をすりむいてたわ。

「あたしたちふたりで、花壇の花を見に来てたのよ。でもさ、水萌ってばトロいから、転んじやって膝をすりむいたの。んで、泣いちやって……。見たところ、そこまでひどいケガじゃなさそうなのね」

「……ほんと、ケガしてるのだ。水萌ちゃん、大丈夫？ 保険室行く？」

基本的に素直なフーミン、あたしの言葉にまったく疑いを持ったりはしなかった。

実際に目の前ですりむいた膝を抱えた水萌が座り込んでいるのだから、疑いようもないのかもしれないけど。

フーミンはクラスメイトの中でも、結構仲のいい子ではあった。だからべつに本当のことを言ってもよかったのかもしれないのだけど。

水萌もあたしに視線を向けて、どうしてそんな嘘をつくのぉ〜？
なんて目で訴えているみたいだった。

あたしはほのかに笑顔を浮かべて軽く頷き返す。

あたしに任せてよ。いつもどおりに、ね。

「こんなの、ツバつけとけば治るよ！ 水萌ってば、ほんとに大げさなんだから。さてと、それじゃ、あたしたちは帰るから。カバン取りに教室に戻らないと。フーミン、じゃあねっ！」

まだ涙を両目に溜めたままの水萌を無理矢理抱え上げるように立

たせると、彼女の腕を引つ張りながら、あたしはその場をあとにした。

「愛の逃避行なのだな！？ さすが仲よしこよしさんは違うのだ！」

なにやらわけのわからない歓喜の声のようなものが背後から聞こえた気がしたけど、それはまあ、無視ってことで。

「熱希ちゃん、ごめんねえ」

昇降口まで走ったところで立ち止まって息を整えていると、水萌がその言葉を発した。

「なんで謝るのよ」

「だってえ、いつも私、熱希ちゃんに迷惑ばかりかけて……」

うるうるうる。

やっと泣き止んだのに、また涙が溢れそうになっている。

「もう、迷惑じゃないってば。大丈夫だよ。水萌はあたしが護るか

ら

「う、うん……」

恥ずかしそうに顔を伏せる水萌。言っているこっちだって恥ずかしかったのだけど。

でも、

「あの、熱希ちゃん……。男の子たちから助けてくれて、ほんと、ありがとう」

にごおっつ。

ふと伏せていた顔を上げ、水萌はあたしに明るい笑顔を向けてくれる。

まだ涙の残った瞳がキラキラと輝いて、背景には無数のお花が咲き乱れているかのような錯覚さえ起こさせる。

ん、もう、可愛いつたらないわ！ 思わず抱きしめたくなくなっちゃう！

あたしは水萌を、このまぶしいほどの笑顔を絶対に護る。そう心に誓っていた。

ようやく微笑んでくれた水萌に、拾って持ってきてあったピンク色の巾着袋をそつと手渡す。

巾着袋には、油性ペンで「さわこみなも」としつかり彼女名前が書いてあった。

この袋の中にはお守りが入っているというのを、あたしは知っている。大切な思い出のお守りなのだそう。

そんなに大事なら、家に置いておけばいいのに。

それはともかく、あたしは今日もこうして水萌を護れたことに満足していた。

その一ヶ月ちょっと前。あたしがこの町に引っ越してきたときのことだ。

クラスメイトが微妙にクラスに馴染んだ頃と思われる五月に、あたしはこの学校に転校してきた。

父親の転勤の都合だし、それは仕方がなかったのだけ。

あたしは学校に通い始めて数日経っても、クラスに溶け込めずいた。

休み時間のたびに、ひとりぼっちで席に座っているあたし。周り

ではクラスメイトの楽しそうな声が響く。

転入生というのは質問攻めに合ったりとかして、いつの間にかクラスに溶け込めていたりするものだと、勝手に思い込んでいた。

だけど、タイミングとか周りにどんな人がいるかによっては、そうならない場合だってあるのだ。

今のあたしからは考えられないことだけど、この頃のあたしは物静かでおとなしい女の子だった。自分から進んでクラスメイトの輪の中に飛び込んでいけるほどの勇気なんて、持ち合わせていなかった。

クラスメイトもあたしのことが気にはなっていたのだろう。たまにチラチラと視線を向けては、ヒソヒソと話す声は聞こえた。

でも、話しかけてくれる子はいなかった。

そんな状況が続けば周りの認識も固まってしまう。

あたしという存在はクラスの中で、話しかけづらい転入生として確固たる地位を築き上げてしまっていた。

そしてあたしのほうも、その状況を嫌々ながらも受け入れ、諦めていたのだろう。

もういいや。このまま静かにしていよう。そんなふうには、ある意味いじけた考えに染まりきっていた。

こんなとき、担任の先生や学級委員が気を遣ってくれるといいのだけ。

単におとなしいだけの女の子。いじめられているわけではないかなのか、まだ日が浅いから様子を見ていただけなのか。

このときのあたしには、誰も手を差し伸べてはくれなかった。

ただひとり、彼女を除いて。

「炎壁^{ほのかへ}ちゃん！」

明るい笑顔を振りまいて声をかけてくれた女の子。それが水萌だった。

炎壁というのはあたしの名字。

その名字が示すとおりなのか、知らないうちにクラスメイトとのあいだに壁を作ってしまったあたしに向かって、彼女は話しかけてくれた。

「すごく激しい感じの名字だねえ〜。めらめら〜。下の名前は熱希^{あじき}ちゃん、だっけ〜？ 炎で熱い、すごい名前〜！」

コロコロと笑いながら楽しそうに話しかけてくる。

熱そうな名前とは、昔からよく言われていた。怒ると我を忘れてしまうのは、あたし自身でも充分に自覚している。

だけど、彼女の感想は、そうじゃなかった。

「すごく温かい名前だねえ〜。熱希ちゃんらしい、いい名前だと思うよお〜」

にこお〜っ。

輝くような水萌の笑顔に、あたしは恥ずかしながら、天使さんが微笑んでくれる、な〜んて思ったものだ。

「私は沢湖水萌^{さわこみなせ}。よろしくねえ〜！」

ちょっとしたんびりした口調で、笑顔を絶やさずに手を伸ばしてくる水萌。

あたしの手をぎゅっと握った彼女の温もりが、冷えきっていたあ

たしの心をも優しく包み込んでくれた。

もちろん、クラスに馴染めていなかったあたしに対する同情はあっただろう。

でもそれから、水萌は休み時間のたびにあたしの席にまでやってきては、いろいろと話かけてくれるようになった。

あたしのほうも少しずつだけど水萌に心を許し、いろいろとお話できるくらいにまでは仲よくなっていた。

そうになると、クラスの他の子からも少しずつ話しかけてもらえるようになって、あたしのほうからも声をかけてみたりもして一ヶ月も経てば、すっかりクラスの一員となっていた。

それもこれもみんな水萌のおかげ。ほんとに感謝してもしきれない思いだった。

ところでそのうち気がづいたのだけど、どうも水萌はクラスの中で少しばかり浮いている存在だった。

正確には、からかわれる傾向にあるといった感じなのだけど。少々のおんびり、というかなんわりトロい彼女。しかもすごく可愛いのだ、なんとなくわかる気はする。

きつと水萌の反応を見て楽しんでるだけで、いじめとかそういうレベルではないのだろう。

ただ、たまに巾着袋を取り上げられたときのような、ちょっと悪質なからかい行為、いじめと言われても仕方がないと思うくらいにまでエスカレートすることがあった。

すぐ泣く水萌も悪いと言えなくもないのだけど、でもどちらが悪いかといったら、考えるまでもなく相手のほうだ。

だからあたしは、水萌が泣いたりしないように護ってあげようと

心に決めていた。

水萌のあの明るい笑顔が見たいから。

水萌にはいつでも笑顔でいてほしいから。

あれからもう八年。

あたし、ほのかへあつき炎壁熱希は高校二年生になっていた。

県立の共学校で、レベルとしては中の上くらいだろうか、ぎりぎり進学校と呼ばれるか呼ばれないか微妙なラインである林原北高校に通っている。

「おはよ〜!」

教室に入ると仲のよいクラスメイトと軽く挨拶を交わしつつ、自分の席に着く。

「あつ、おはよう〜、熱希ちゃん」

優しい笑顔を向けて挨拶してくれたのは、大切な親友である沢湖さわこ水萌みなも。

彼女はあたしのひとつ前の席に座っていた。

「ん、おはよ〜! 今日も笑顔全開ね!」
「うふふっ」

あたしと水萌は、小学校三年生で一緒になって以来、ずっと同じクラスが続いている。

彼女を護ると誓いを立てたあたしとしては、とても嬉しいことだった。いつときたりとも水萌と離れていたくない、そう思っているのだから。

水萌と同じ高校を受験したのも、その思いからだった。あたしに

はちょっとレベルが高い高校ではあったけど、水萌と一緒にいたい一心で頑張ったのだ。

でも同じ高校に入れたとはいえ、クラス分けなんて、いくら望んだって思いどおりになるものじゃない。それなのに、一年も二年も同じクラスになれた。

だからこれは運命なんだ、神様があたしと水萌の仲を取り持ってくれているのだ、とまで思っていたりする。

「キミたちは、相変わらず仲がいいのだ。もう、ラブラブって感じなのだ」

不意に後ろの席から声がかかる。

この変な喋り方。さすがにもう慣れたけど、彼女も小三すずしろみづみのときからずっと一緒のクラスの腐れ縁、フーミンこと涼城風民すずしろふうみんだった。

ああ神様。どうしてこの子までずっと一緒なの？

「誰もふたりのあいだに割って入ることはできない、って感じだな。でも、暑苦しいからあまりイチャイチャしないでほしいけど」

さらにあたしの隣の席からも声がかかる。

こいつは土柳草砂ひつしやなぎくさすな。

ほんつとに嫌な運命だと思うのだけど、この男も小三からずっと一緒のクラスだった。

水萌をよくいじめていた男の子たちのリーダー格だった奴だ。

神様って意地悪だ。こいつまで一緒だなんて。拷問かなにかですか？

とはいえ、さすがに今でも水萌をいじめているなんてことはない。

高校生にもなったのだから、当たり前だけど。

だいたいあの頃だって、気になる女の子にちょっかいを出してからかっているだけだったんだろうし。

でもそれは、あたしにとっては無視できないこと。

おそらくこいつは当事、水萌のことが好きだったはずだ。

今でもその想いが続いているのかはわからないけど、事あるごとに水萌に話しかけようとしている気はする。だから、油断のならない奴なのだ。

そう思っただけで、なぜか以上四名、いつも一緒にいることが多い。

有名な仲よし四人組などと言われてもいる。

その中でもとくにあたしと水萌は、女同士だけど友達以上の関係と噂されるほどの仲のよさと評判。

若干、呆れられている感もあつたりするけど、そこはそれ。べつにあたしは気にしない。

もちろん水萌も、いつもながらのほんわか笑顔で、気にするはずがなかった。

おとなしめでいつも笑顔の水萌。でも、ちょっと抜けてるといのか、ずれてるといのか、いわゆる天然ってやつなのだろう。

あたしですら、水萌の会話の展開にはついていけないことがあつた。

それでもあたしにとって、水萌は唯一無二の親友なのだ。

それなのに、どうしてもいつも四人ひとまとめで見られるのか。ちよつと納得のいかない部分もありつつ、それでも安穩と楽しい高校生活を送っているのだった。

「イチヤイチヤなんて言うな！ 親友同士の神聖なる友情を汚すような言い方をするんじゃない！」

あまり気にはしてなかったものの、土柳に言われるとなんだか無性に腹が立つ。

あたしは、いつもどおりの鬼の形相で言い返した。
なぜかこいつに話しかけるときは、そんな怒りの表情が多い気がする。ま、これも運命だと思って諦めてもらおう。

「うぐぐ……。鬼ババめ……。！」

「鬼ババ言うな！」

「ひい！」

土柳は今でもあたしを鬼ババ呼ばわりすることがある。こんな表情で凄んでいるのだから、自業自得と言えなくもないけど。

でも、さすがにそんな言い方をされては、気分のいいものではない。

さらに怖い形相を作り出して怒鳴るあたしに、怯えた真つ青な顔になって悲鳴を上げる土柳だった。案外、根性のない奴なのだ、こいつは。

と、そんな様子を、ほのかな笑顔を浮かべて眺めている水萌に気づく。

「水萌！ なにニヤニヤしてるのよー!？」

「うふふ、熱希ちゃんと土柳くんって、ほんとに仲がいいなあ〜って思っ
て見てたのお〜」

にっこにっこ。

そんな嬉しそつに変なことを言わないでよね！

「あのねえ、いったいどこをどう見たら、仲よく見えるのよ！？」
「そうだそうだ、こんな鬼ババなんかと仲よくできるわけが……」
「なんか言った！？」

ギロリッ！ 再びの鬼ババ呼ばわりに、睨みを利かすあたし。

「ひい〜！」

土柳はもちろん、また悲鳴を上げて縮こまった。

「きゃははっ！ 完璧に、息ピッタリの夫婦漫才にしか見えないのだ！」

「フーミン、あんたまで！ 殴るよっ！？」

「ぎゃ〜！ もう殴ってるのだ！ 暴力反対〜！」

「ふふふ」

今日も教室内には、主にあたしたち四人のじゃれ合う声が大きく響いていた。

いつもどおりの一日が終わり、放課後になった。

部活に入っていないあたしたちは、通学路をだらだらとお喋りしながら歩いていた。

「しっかし、梅雨明け前だったのに、暑いわねえ」

制服の裾をパタパタと揺らして風を送り込みながら、あたしはぼやく。

「熱希ちゃん、はしたないよぉ。おへそ見えちゃってるぅ」

すかさず注意してくる水萌。

自分だってぼーっとして、はしたない格好をしていることがあるくせに、他人のそういう格好には敏感に反応するのだ、この子は。

「む、でも暑いし。アイスでも買っついていかない？」

「そうだねえ、そうしよっか」

「きやははっ！ それがいいのだ」

「うん、まあ、異論はない」

あたしとしては水萌とふたりで歩きたいのに、いつもいつもフーミンと土柳も一緒だった。

帰る方向が同じで、みんな帰宅部なのだから当然の流れとも言えるのだけ。

それはともかく、今はアイスだ。

あたしたちはコンビニでソフトクリームを買って、食べながら歩く。

これだつてはしたないだろうに、今度は水萌もなにも言わない。涼しい顔をしていたけど、やっぱり彼女も暑かったのだろう。

とはいえ、さすがに人通りもそれなりにある通学路。このまま歩きながら食べていたら迷惑だろうと、近くの公園へと足を運ぶことになった。

誰かの家まで行ってクーラーで涼みながら、なんて贅沢ができれば一番いいのだけど、四人とも家にクーラーがなかった。

まったく、使えない奴らだ。

もちろん自分のことは棚の上にポイ。

「熱希ちゃんのそれって、オレンジ味？」

「え？ 違うよ。マンゴー味、最近よく見かけるじゃん。水萌、食べてみる？」

「うん」

ぱくつ。

あたしの食べかけを、躊躇もせずに口に運ぶ水萌。

「代わりに水萌の、ちょっともらっね」

ぱくつ。

あたしも水萌が食べていたストロベリーとバニラのミックスソフトにかじりついた。

「あ、熱希ちゃん、私よりたくさん食べたあ」

水萌は、そんな子供染みた文句を言ってくる。

仕方がないなあ、この子は。

「ほら、もっと食べていいから」

あたしがマンゴーソフトを彼女の目の前に差し出すと、「わーいとばかりにかぶりついてくる。

「うーん、相変わらずなのだ」

「うん、相変わらずだ」

呆れ顔のふたりがあたしたちの様子をジト目で見ながら、そんな感想を漏らしていた。

公園を出て少し歩くと、待望の時間がやってくる。

家の方向の関係上、フーミンや土柳とはここで別れ、水萌とふたりの時間となるのだ。

といっても、あたしの家はこの路地をまっすぐ行った先のすぐ右手にある。

距離にして百メートルくらいだろうか。

ふたりきりの時間が短すぎるのが、とても残念なのだった。

「やっと涼しくなってきたわね」

「そうだねえ、すぐ暗くなるよあ」

あたしは水萌に話しかける。少しでも一緒にお喋りを楽しみたい

からだ。

水萌はあたしから話しかけないと、なかなか自分からは話しかけてくれない。基本のおとなしいタイプの女の子なのだ。

別な言い方をすれば、受けの性格、ということになる。だからあたしが攻めにならないと。

あれ？ なにかおかしいような気も……。

ま、いいか。

「それにしても水萌、その巾着袋、いい加減新しいのに買い換えたら？ さすがにちよつと、汚いじゃない」

彼女のカバンには、薄汚れた巾着袋がぶら下げられていた。

小学生の頃いじめっ子たちにからかわれていた、宝物と言っていたあの巾着袋だ。水萌はそれを、出かけるときには必ず持ち歩いている。

「うー、でもこれは袋も中身も宝物だからあー。汚いなんて言われたらあー、いくら熱希ちゃんでも、私怒っちゃうよあー？」

微妙に涙目になりながら訴えかける水萌。

ふにやー、こんな可愛い水萌にだったら怒りたいかも、なんて思ってしまうあたしはダメ人間でしょうか？

そんな感じで喋っていると、すぐに楽しい時間は過ぎ去ってしまった。

「もう家に着いちゃった」

「ふふふ。お疲れ様あ、熱希ちゃん。また明日ねえ」

「うん、またあし……」

手を振って玄関に向かおうとして、なんとなく、違和感を覚えた。

あれ？　今、なにか視界の隅に映ったような……？

あたしは背筋に冷や汗を感じながら、辺りを見回した。主に今あたしたちが歩いてきた道のほうを。

すでに薄暗さが周囲を包み込み、目を凝らしてもはっきりとは確認できない場所が残る。

「ん〜？　熱希ちゃん、どうしたのお〜？」

水萌が不思議そうに首をかしげる。

あたしは、嫌な予感がしていた。

ぱつ。水萌の腕に自分の腕を絡める。

「え？　熱希ちゃん〜？」

「しっ。黙って歩いて。一緒に水萌の家まで行くわ。今日、水萌のところに泊めてね」

「え……、うん〜、それは構わないけどお〜……」

怪訝な表情を浮かべる水萌を引つ張り、あたしは水萌と仲よく腕を組んだ状態で薄暗い路地を歩み抜け、彼女の家へと向かった。

水萌には両親がいない。

幼い頃、山奥の田舎村に住んでいた水萌は、両親が亡くなったため親戚であるこの家に引き取られたのだそうだ。

水萌を悲しませたくないから、あまり細かくは聞いていないのだけだ。

ただ、あたしはよく水萌が今住んでいる家に遊びに行っていた。

共働きで遅くまで帰ってこない親戚夫婦には、子供がいなかった。だからなのか、水萌のことを本当の娘のように可愛がっているように思えた。

水萌自身も、よくしてもらってるよ、と言っていたから間違いないだろう。

水萌が寂しいだろうと思って、あたしはよく水萌の家にお泊りしていた。

そのときに叔父さん、叔母さんともお話したことがあるけど、とても気のいい夫婦という感じだった。

「あら、熱希ちゃん、来てたのね。今日も泊まってくの？」

「あつ、叔母さん、お帰りなさい。ご迷惑おかけしますけど、お願いします」

「ふふふ、迷惑だなんてとんでもない。賑やかになっていいわよお」

夜になって仕事から帰ってきた叔母さんと挨拶を交わして、夕飯までご馳走になる。

叔父さんはまだ仕事から帰ってきていなかったけど、楽しい団らんのひとつときだった。

ただどあたしは、その時間を素直に楽しむことができないでした。

「熱希ちゃん、どうしたのお？」

水萌の部屋に戻ると、彼女が心配そうに訊いてきた。

さすがに元気がないのを不審に思ったのだろう。

「ん、なんでもないよ」
「ふん？」

首をかしげている水萌。
わざわざ彼女を不安にさせることもあるまい。まだ確信は持てないのだから。

あたしはさりげなく窓のほうまで歩き、カーテンの端をそっと開けて外に視線を巡らせてみた。

一瞬、誰かが物陰に隠れているような、そんな気がした。

やっぱり、誰かに見られてる？

夕方、あたしの家の前で、誰かの視線を感じた。

だから水萌の家まで来たのだけど、ふたりで寄り添って歩いているあいだも、足音がついてくる気配を感じ続けていた。

振り返って確かめたわけではないから、あたしの気のせいかもしれないけど。

でも、どうしてもあたしは、胸騒ぎが抑えられなかったのだ。

水萌、ストーカーかなにかに狙われてるのかな……？

それは充分にありえることだ。なんととっても、水萌は可愛いのだから。

ただの気のせいであってほしいけど、すごく心配だ。

しばらくは水萌から離れないようにしよう。あたしはそう決意していた。

「それじゃ、寝よつか」
「うん」

あたしは電気を消して、水萌の入っているベッドに潜り込む。
お泊りするときには、いつも水萌のベッドと一緒に寝ていた。
水萌はベッドに入るすぐに眠ってしまう。そんな彼女の温もりを
すぐ目の前に感じながら、あたしの意識もまどろみの奥へと落ちて
いった。

翌朝。あたしは水萌と一緒に登校していた。

とはいえ、一緒に登校するのは今日に限ったことではない。

あたしの家は水萌の家と学校のあいだにあるため、いつも水萌があたしの家に呼びに来てくれて、そこから一緒に登校していたからだ。

朝食まで用意してくれた叔母さんにお礼を言って玄関を出る。もしかしたら昨日の人影がまだいるかもしれないと考え、視線を巡らせ辺りをうかがった。

さすがに朝からはいないのか、隠れているような人の気配はまったく感じなかった。

それでも、気を抜いてはいけない。あたしは警戒しながら通学路を歩く。

自分の家には昨日のうちに電話をして水萌の家に泊まることを告げていた。

あたしの家は、どうも放任主義というか、自主性に任せているというのか、はたまたあまり気にかけられてないだけなのか、ともかく、うるさく言われることなんてほとんどなかった。

もつとも、水萌の家に泊まるのが月に何回もある日常的な行動だからなのかもしれないけど。

「熱希ちゃん、また水萌ちゃんちに泊まったのだな？」

急に背後から声がかかった。

あたしは辺りを異常なほど警戒しながら歩いていたというのに。

気配を消して背後に近づくと、お主、何者だ！？ なんて言う

までもなく、喋り方で瞬時にわかる。

「フーミン！　なんであたしが水萌んとここに泊まったってわかるの！？」

ここはすでにあたしの家を通ぎた先の通学路なのだ。

水萌とはいつも一緒に登校しているわけだし、泊まったとわかるわけがないのに。と思ったのだけど。

「だって、朝寝坊の熱希ちゃんを呼びに行ってから登校したなら、こんな早い時間にここを通るはずないのだ」

……なるほど、鋭い推理だね、ワトソンくん。

どうやらあたしは、かなりずぼらなイメージで見られているみた이었다。いやまあ、大正解なのだけど。

「フーミン、おはよあ〜」

にこっつ。

爽やかな笑顔で挨拶する水萌。

とはいえこの子、実はすさまじい低血圧だったりする。朝のこの時間だと、普通に歩いたり挨拶したりしているにもかかわらず、ほとんど脳は眠っているという器用な子なのだ。

そこは長年のつき合いであるフーミンもわかっていて、

「ん、おはようなのだ！　でも、ちゃんと起きるのがよいのだよ！」

とかなんとか言って水萌の鼻と口をつまむ。

にこっ。

笑顔を張りつけたままの水萌だったけど、息ができればこの子でもさすがに苦しくなる。

顔がどんどん真っ赤になっていって、今度は青く……ってちょっとフーミン、やりすぎだつてば！

「ぶふあ〜……。けほけほつ……。あらあ〜、熱希ちゃんにフーミン、おはよあ〜」

フーミンの手をつかんで水萌を助けると、彼女はちょっと咳き込んだものの、何事もなかったかのように挨拶する。

あんだ……。

あたしがずっとそばにいたことすら、夢つつだったってわけね……。

「ん〜？」

にこにこにこ。

そんなあたしを、水萌は首をかしげてハテナマークを浮かべながら見つめている。

ああ、もう。そんな笑顔を向けられたら、なにも言えないじゃない！

もともと文句を言うつもりなんてなかったけどさ。正確には、言っても無駄なことなのだけど。

と、そんなあたしたちの目に、微妙に不自然な光景が映った。

土柳の奴が歩いている。

それはいいのだけど。

奴は女の子と手をつないで歩いてた。

彼女とかそういうのではないだろう。なんせ手をつないでいる相手は、小学生くらいの女の子だったのだから。

あたしはすかさずツッコミを入れる。

「あんた、なに幼女誘拐なんてしてんのよ!？」

「うあ、炎壁! って、幼女誘拐ってなんだよ!？」

「その子よ、その子! 小学生を誘拐してくるなんて!」

「あほか! こんな朝っぱらから人通りの多い通学路でそんなことをするか! って、そういう問題じゃなくて!」

朝っぱらから怪しげなやり取りを交わすあたしたちに、通りがかりの生徒たちも何事かと視線を向ける。

そんな様子を察知したのか、小学生と思われる女の子が、深々と頭を下げてから話し始めた。

「皆様方、兄がいつもお世話になっておりますでございます。わたし、土柳草砂ちばなの妹で、地花ちばなと申しますです」

かなりおかしな丁寧語を使いながら、必死に自己紹介してくれる女の子。

これはこれで、可愛いわあ。

でも、妹だったのか。

ま、土柳の奴に、犯罪に手を染める根性なんてあるはずないのだから、予想はしていたけど。

「妹さんだったのね。誘拐じゃなかったんだ。ちえっ!」

「ちえ、ってなんだよ!」

土柳はあたしがなにか言うと絶対突っかかってくるから面白いわ。

それはともかく。

「地花ちゃん、だっけ？ 小学生だよ、四年生くらいかなあ？」

「えっと、学年は二年生でございますです」

あたしの問いに、はっきりとした口調で答える地花ちゃん。

「ほえ〜。小学校二年生にしては、しっかりしてるなあ。土柳の妹なのに。きつと血はつながってないんだろっね」

「お前なあ……」

土柳のぼやきを当然ながら無視していると、地花ちゃんが控えめに口を開いた。

「あのあの、訂正が遅れて失礼致しましたですよ。わたくし、小学生ではなくて、中学生でございますです」

「え……ええええ〜〜〜っ!？」

朝の通学路に、土柳兄妹以外三人の声がこだました。

中学二年生にはまったく見えないほど小さい地花ちゃんは、お兄ちゃんである土柳にべったりらしい。

土柳は毎日手をつないで中学校まで送ってから登校していたのだという。

地花ちゃんの学校は、林原北高校から歩いて五分程度の距離にある、市立林原中学校だった。

考えてみたら地花ちゃんの服装はセーラー服。あたしたちが一年ちよっと前まで着ていたのと同じ制服だ。

だから、彼女が中学生というのは事実なのだろう。

いつもならもっと早い時間に送っていたようだけど、今日は行事の都合でいつもよりも中学校の始まる時間が少しだけ遅かったため、この時間に歩いていたのでそうだ。

中学生にもなってお兄ちゃんにべったりって、どうなのよ、しかも土柳の奴なのに。とも思ってたけど、まあ、人それぞれなのだろう。そんなこんなで地花ちゃんに話を聞きながらゆっくりまったり歩いていたら、あたしたちはしっかりと遅刻してしまった。

あつ。

教室に入ると朝のホームルームはもう終わっていた。それはべつにいいのだけど。

一時間目の授業が始まるのをぼーっと待っているとき、あたしはふと気づいた。

地花ちゃんと会ったことですっかり忘れていた。水萌を狙うストーカーの件を。

大切な水萌に関する、こんな大切な、というか大変な話を忘れてしまっていたなんて。

あたしのバカバカバカ！

でも……じっくり腰をすえて話したほうがいい内容。短い休み時間では話しきれないかもしれない。

ここは昼休みを待ってから話したほうがいいかな。それまでに、頭の中で考えをまとめよう。

あたしは、そう決めた。

そんなわけで午前中は授業に集中できなくて、ぼけーっとしているのを見咎められて先生に怒られたりしたのだけど。

「まったく、あんたはいつもいつも……」

なぜどの先生にも、「いつも」と言われるのだろうか。謎だわ。

それはともかく、昼休みになった。

あたしたちはいつも食堂を利用している。

フーミンはお弁当派なのだけど、それでもあたしたちと一緒に食堂で食べる。今日もいつもどおり、四人で席を取った。

そう、どういいうわけか土柳の奴もあたしたちと一緒に昼を食べているのだ。

女子の集まりの中に男子が入ってくるな！ とあたしは怒鳴りつけてやったのだけど。

まあまあ、いいじゃない、大勢のほうが楽しいよお、なんて水萌に笑顔で言われたら拒否なんてできなくなってしまうってものだ。

と、土柳の奴のことなんてどうでもいい。

今はストーカーの件を話し合わないと。

他の生徒の声でうるさい食堂で話すのもどうかとは思っただけど、逆に喧騒に紛れていいかもしれない。

「ストーカー？」

あたしがテーブルに身を乗り出して小声で話し始めると、他の三人も同じように身を乗り出し小声になる。

本当はすぐにでも話したかったけど、一応みんなが食べ終わるのを待ってから話し始めた。そうでないと、こんなふうに乗身を乗り出したら、制服のリボンやネクタイが、ラーメンやうどんやらお味噌汁やらに浸かっちゃうからね。

「うん。確信はないんだけど、なんか、水萌のあとをつけてるみたかった」

「……という話をすれば自然な流れで水萌ちゃんのお泊りできるから、そんな嘘をついた。というわけではないのだね？」

フーミンのツッコミに過剰に反応するあたし。

「な、なんであたしがそんなことするのよ！ ……でも、結構いい作戦かも……」

後半に思わず本音がただ漏れしていたのはご愛嬌ってことで。

「……ま、炎壁にはなにも言うまい。とりあえず、詳しく話せよ」

真剣な顔でそう言う土柳。親身になって話を聞いてくれる姿勢がうかがえる。

実は案外いい奴なのかもしれない。あたしの中の土柳のポイントがマイナス三万ポイントから一気にマイナス五百ポイントくらいまで急激にアップした感じた。

とにかく、あたしが昨日の帰りに感じた気配と、水萌の部屋から見えた人影のことを、みんなに詳しく語って聞かせた。

「熱希ちゃん〜、本当にそうなのお〜？ 怖いよお〜」

怯える水萌。

こんな表情をさせたくないから、話したくはなかったというのが正直な気持ちだったけど。

でも、なにか起こってしまったからでは遅いのだ。それに水萌は絶対にあたしが護るのだから。

「大丈夫、あたしがついてるよ」

「うん〜……」

横に座っていた水萌が、あたしの腕にすり寄ってくる。

「ふむ。でもそれだけだと、熱希ちゃんの気のせいという可能性も捨てきれないのだ」

「そうだな。もちろん沢湖さんが危険にさらされないように充分注意したほうがいいと思うけど、本当にそんな人影が存在するのか、まずは確認する必要があるな」

水萌と違って、他のふたりは冷静だった。

「じゃあ、今日の放課後、いろいろ寄り道しながら確認するといいいのだ」

「ああ、そうだな。頑張れよ」

がしつ。

あれだけ親身に聞いていたのに、今さら逃げようとする発言を吐きやがった土柳を、あたしは後ろから羽交い絞めにして首を決める。

「あんたも、協力するんだ！」

「いや、その、今日はさ、妹と散歩に行く約束が……」

「妹と散歩って……。ツッコミどころだとは思うけど、ま、それはいいわ。ともかく散歩と言えなくもないんだから、妹さんもあたしたちと一緒に来ればいいじゃない」

あたしの提案に、

「どつしてそうなるんだ！」

などと土柳は異論を唱えやがった。

もちろんここは多勢に無勢、民主主義の正しい解決法、多数決に

よって問答無用という流れとなったのは言つまでもない。

「はあ、わかりましたのでございます」

校門を出て待ち合わせ場所に着いたあたしたち。

待っていた地花ちゃんに、「じゃ、そういうことだから」と言うと、彼女は素直にあたしたちの申し出を受け入れてくれた。うーん、兄と違って物分りのいい子で助かった。

「草砂兄クサシがすまきにされている現状を見れば、わたくしがどう足掻いたところで、結局ケツギ一緒する羽目になるのが目に見えておりますでございますし」

はあ、つとため息をつく地花ちゃん。

どうやら、諦めのいい子と言ったほうがよさそうだった。

それはともかく、作戦決行だ。

地花ちゃん以外には事前に教室で話してある。そして地花ちゃんにはあらかじめ土柳からメールで連絡してもらってあった。

だからさっきのような会話で、状況を理解してもらえたのだ。

しかし土柳の奴、生意気にもケータイを持っているとは。

くうくうくう、あたしや水萌は持ってないってのに。

持っていたら絶対毎日何十通も水萌とメールするのにっ！

と、それは今は置いて。

土柳のケータイは、地花ちゃんとお揃いの花柄で可愛いケータイだった。

それをネタに思う存分からかわせてもらったけどさ。くっくっく。

と、それも今は置いて。ともかく、連絡はついている。作戦としてはこうだ。

地花ちゃんという新たな仲間が増えてはいたけど、いつも一緒に帰っているこのメンバー。

とりあえず途中までいつもどおり一緒に帰る。

危険を回避するなら全員でまとまっていたほうがいいだろうけど、それでは相手の動きに気づけるかどうかわからない。

それに、大勢で一緒にいたらきつとストーカーだって警戒するだろう。

なので、二手に分かれることにした。

あたしと水萌が、買い物に行きたいからと商店街のほうへ寄り道する。他のメンバーは、じゃあここで、と言って別れる。

で、あたしたちふたりのあとを、かなり離れた場所から追いかけてきてもらうのだ。

ストーカーがいるなら、少なくともあたしたちが視界に映る範囲内に隠れているはず。

だから、買い物ルートをあらかじめ決めておき、あたしたちが視界から少し外れるくらいの位置を保ったまま、辺りの様子をつかかってもらうことにした。

怪しい動きをする人がいれば、これできつとわかるだろう。

離れて様子を探る土柳兄妹とフーミンの三人のほうこそ、不審人物と思われるかもしれない、という心配があるのは事実だった。

職務質問くらいはされるかもしれないけど、そこはそれ、捕まるのはあたしじゃないからOKってことで。

そんなわけで水萌とふたりきりの時間をしつかりゲットしたあたし。

なんて手放して喜んでいられる状況ではないのだけど。

ともかく、こちらはあくまでも、おとりだ。

周りに注意しつつも、不自然さを出さないようにしなければならぬ。

「わあ〜熱希ちゃん、見て見てえ〜！ このぬいぐるみ可愛いよお〜！」

子犬のぬいぐるみを手にとって頬にすりすりしている水萌。

うんうん、可愛いよお〜。水萌がねっ。

「わあ〜熱希ちゃん、見て見てえ〜！ この服、可愛いよお〜！」

今度はひらひらのついたワンピースをうっとり眺める水萌。

さすがに洋服に頬をすりすりしたりまでしてないけど。

うんうん、ほんと、可愛い可愛い。そんな服を着た水萌を想像しただけで、あたしは思わず顔が緩んじやうよっ。

こんな感じで楽しいひとときを過ごしているうちに、夕方になった。

当初の目的をほとんど空の彼方にすっ飛ばしてしまいそうになりながら、あたしはどうにか、たまあ〜〜に思い出して辺りの様子をうかがっていた。

その結果、やっぱりこそこそ隠れているような人影を確認することができた。

あたしも水萌もケータイを持っていないので、みんなと連絡はつけられないけど、ここは当初の予定どおりに行動しよう。

ひとしきり商店街を回ったあと、あたしたちは家路に就く。

今日も続けて水萌の家に泊まったりしたら不自然かもしれないから、あたしは自宅へと戻るようになっていた。

「それじゃ、また明日ね！」

「うん、また明日あ〜」

あたしと別れたあと、水萌はひとりになってしまっけど、彼女を視界に捉えられる範囲で三人組が隠れて追跡する手はずになっている。

家に入る前に、こそこそ隠れて歩いている三人組の姿が確認できた。うんうん、ちゃんと役目を果たしているようね。

もし水萌に危険が及ぶようなら三人で助けること。これは絶対！
そう念を押してあった。

念のため、ふと目が合った土柳を睨みつけておく。

ひいつ、と小さく悲鳴を漏らし怯えた目をする奴を見て、あたしは満足しながら玄関に入るのだった。

このあとは、水萌が家に着くまで追跡したらフーミンは自分の家に帰り、土柳兄妹はそのまま水萌の家の周りで様子をうかがい続けることになっている。

土柳だけだと怪しいと思われるだろうから、地花ちゃんも一緒に、ということにしてあった。もちろんそれでも怪しいだろうけど。

フーミンが家に着いたら、あたしの家に電話を入れる。状況報告のためだ。

ケータイを持っている土柳兄妹に報告を任せなかったのは、もしストーカーに見つかっていたら、電話をした時点で危険が迫る可能性もあると考えたからだ。

玄関を上がったあたしは部屋にカバンを置くとすぐに電話の前に陣取り、今か今かとフーミンからの連絡を待っていた。
うつうつと、待っている時間って、ほんと長い。

ああ、こんなことをしているあいだに、水萌が危険な目に遭っていないだろうか。

そんな心配ばかりが浮かんできて、そわそわしながら電話の前を行ったり来たり。

弟が腫れ物に触れるような目で見ながら、あたしを避けるように廊下をすり抜けていった気がしたけど、そんなの今のあたしの眼中にはなかった。

ジリリリリリリリン。

電話が鳴った。

あたしは最初の呼び出し音が途切れる間もなく、今どき珍しい黒電話の受話器を手に取る。

「遅い！」

「うあ、いきなりなんなのだ。ウチはこれでも大急ぎだったのだよ？」

あたしの剣幕に、さすがのフーミンもたじろいでいるようだった。と、そんなことより報告だ。あたしはフーミンから今日のことを話してもらった。

あたしたちが商店街をうろついているあいだ、やはり怪しい人影が隠れて見ているのがわかったとのこと。

しかも、それはひとりではない。

何ヶ所かに分かれて、数人いるようだった。

「ひとりじゃないの？ それって、ストーカーってわけじゃない……ってことかな？」

「うん、よくわからないのだ。でも、怪しい奴らが水萌ちゃんをこそこそ隠れて見ていたのは確かなのだ」

複数の怪しい人影……。

これって、あたしたちの手に負える事態なのだろうか？

フーミンの報告は、まだあった。

あたしと別れたあと、水萌はひとり歩いていただけ、そのときも水萌をうかがう人影の存在を確認することができたそうだ。

今までずっと、水萌があたしとふたりでいるときに気配を感じていた。もしかしたらあたしのほうが狙われているのでは、という可能性も考えていたのだけど。

でもこれで奴らの目的が水萌だということもはっきりした。

「水萌、今、大丈夫かなあ……」

「それは大丈夫だと思うのだ。土柳兄妹も監視してるのだし。もしなにかあったら、ケータイでウチの家に連絡する手はずなのだ。電話中にかかってきてもキャッチホンでわかるから、電話は来てないってことなのだよ」

「そっか。でも、心配だなあ……」

ああ、今すぐにも水萌のもとへ飛んでいきたい。

「心配だからって、夜に水萌ちゃんの家まで行ったりしちゃうダメなのだよ？ 熱希ちゃんが危険な目に遭うかもしれないのだ」

あたしの考えを読んでいるかのように、フーミンが釘を刺す。

「……わかってるよ」

「よろしい。おそらく家の中にいれば水萌ちゃんも安全なのだ。だから、軽はずみな行動は慎むのだよ」

「うん」

「それじゃあ、そろそろ切るのだ。土柳のケータイにも電話をかけて合図しないといけないし。三秒くらい鳴らして切るのが終了の合図にしてあるのだ。さすがに徹夜で監視させるわけにもいかないのだよ」

「ん、そうだね。それじゃあ、よろしくね」

あたしは不安を抱えたまま、電話を切った。

ああ、水萌、大丈夫かなあ。

その夜は、心配しすぎてなかなか寝つけなかった。

「本日、第二作戦を決行します！」

「はい？」

次の日の教室、朝のホームルーム前の時間。あたしが高らかに宣言する声に、疑問符を返してくる面々。

それはそつだ。第二作戦というのを、まだ説明していないのだから。

あたしは、夜なかなか寝つけないあいだに、いろいろと考えていた。

警察に言ったところで、なにも被害が出ていない上に、証拠もない現状ではなかなか信じてもらえない。

まずは奴らの目的を確かめるのが先決だろう。

でも、どうやって確かめればいいのか。

じつくりと監視し続ける？

いやいや、そんなまどろっこしいこと、やっていられない。

そのあいだに精神がまいってしまってもものだ。

狙われている水萌本人はのほほんとしているから大丈夫だろうけど、心配するあたしの精神のほうがヤバイ。

ここはいつちよ、奴らをとっ捕まえて直接聞いてしまえば手っ取り早い、そう考えたってわけ。

「熱希ちゃん、それは危険だよ〜」

水萌がもつともな意見を述べる。

「うん、確かにそうなのだ。いくら熱希ちゃんが水萌ちゃんのためなら車だって持ち上げちゃうくらいだとしても、さすがに危ないのだ」

フーミン、それは言いすぎだよ。

いくらあたしだって、そこまでは。バイクくらいなら、いけるかもしれないけど。

「そうだぞ。沢湖さんを危険から護るためとはいえ、炎壁が危険にさらされるのは、さすがにちょっとマズいだろ」

おっ、土柳の奴、あたしのことまで心配してくれるんだ。へへ、珍しい。

「余計に事態がこじれそうだし」

余計なことをつけ加えた土柳には、脳天チョップをお見舞いしてやった。

「でも、だからこそ、こうしてみんなに相談してるんだよ。あたしひとりじゃどうにもならなくても、力を合わせればどうにかなるかもしれないでしょ?」

あたしは、ぐっとこぶしを握って力説する。

「そうねえ。みんなで協力して事件を解決。それって、素晴らしいわあ」

水萌が乗り気になっている。うんうん、思ったとおり。

最近彼女は少年探偵もののマンガにはまっついていて、ちびっ子たちが協力して事件を解決するのをうっとりとした目で見ていたのをあたしは知っているのだ。

水萌が喜んでくれるなら、あたしはなんだってする。彼女が望むなら悪魔にだって魂を売るわ！

ふと見ると、フーミンがジト目であたしを見ていた。なるほど、そういうことなのだね。そう瞳で語っているようだった。

相変わらず喋り方はおかしいのに、なかなか鋭い。

「ま、それにさ。危険な目に遭うとしたら、主に土柳だから。危険だと判断したらあたしたちは土柳をおとりとして置いて逃げるしっ！」

「それはまあ、そのとおりなのだ」

「おいこら！ なんだよ、それは!？」

あたしとフーミンの当然のごとき主張に、土柳はどういうわけだか慌てた声で反論してくる。

でもほら、民主主義民主主義。と、問答無用で主張を押し通そうと思ったのだけだ。

「土柳くん、いつも迷惑かけてごめんねえ。でも、私たちにはあなたが必要なのお。お願いしますねえ」

にこおっつ。

満面の笑顔を咲かせてそんなことを言う水萌。

……あんたもなかなかやるわね……。

「迷惑だなんてとんでもない！ 沢湖さん、僕に任せてくれていい

よ！」

真っ赤になって自ら泥沼にはまり込んでいく土柳だった。

で、具体的にどうするのかというところ。

あたしたちは放課後、公園に来ていた。

子供たちが喜びそうな、ブランコやら滑り台やら砂場やらジャン
グルジムやら、そんな遊具がいろいろある、いわゆる児童公園だ。
こないだはここでベンチに座ってアイスを食べたっけ。

それはともかく、今はもう初夏。夕方近くになっているとはいえ、
まだ日差しも強い。

公園で遊ぶ子供たちの姿もまばらだった。

そんな中で、あたしたちは、

「もういいかい？」

「まあ〜だだよ〜」

かくれんぼを始めた。

高校生にもなつて、かくれんぼだあ〜！？ 僕はイヤだぞ！？

と駄々をこねる土柳もねじ伏せ、一緒に混ざってもらっている。

公園に来る途中、偶然出会った地花ちゃんも強制連行……もとい、
お姉ちゃんたちと一緒に遊べると喜んでついてきてくれた。

作戦としては、こうだ。

公園でかくれんぼを始めるあたしたち。

最初は普通に遊んでいるように見せかける。でも、そのうち異変に気づいてあたしが言う。

「あれ？ 水萌は？」

「あれ？ いないのだ」

そして水萌以外が一ヶ所に集まってから、大声で水萌の名前を呼んで彼女を探しているふりをする、というものだ。

公園の中央には、象さんをかたどった滑り台がある。その胴体部分には、横から突き刺さるように土管が設置されていた。

真横から見ると、ふたつ並んだ土管の上に、もうひとつの土管が積み上げられている感じた。

三つの土管は、ぱっと見、象の胴体を貫いて設置されているだけのように見える。

でも実は、下側の土管の片方には、ちょうど真ん中辺りからさらに別の土管が垂直につながっていて、横穴が存在している。

水萌はそこに隠れていてもらうのだ。

外から土管をのぞき込んだとしても、よく見ないと横穴の存在には気づかない。

おそらく、この土管に実際に入って遊んだことのある人にしかわからないだろう。

あたしたちが必死に水萌を探していたら、奴らも慌てるはず。

本当に奴らが水萌の様子を隠れてうかがっているのであれば、水萌が突然いなくなったら、きつとなんらかの動きを見せるだろう。

もし慌てている様子があれば、それだけでも水萌を隠れて見ていたという証拠になる。

公園内に入ってきて探し始めたりすれば、こちらの思うツボだ。あたしたちは小さい頃からよくこの公園で遊んでいた。だから地の利はこちらにある。

複数いる奴らの全員を一網打尽、とはいかなくとも、みんなで協力すれば誰かひとりを捕まえるくらいなら可能だろう。そう考えたのだ。

というわけで、ミッションスタート。

公園を取り囲むように何ヶ所かに分かれて身を潜め、こちらの様子をつかがっている怪しい奴らの存在を、あたしたちはすでに確認していた。

作戦が開始されるとすぐ、奴らはこちらの思惑どおり、慌て始めた。

ここからでは正確にはわからないけど、人数は五、六というところか。どうやら公園の入り口前付近の物陰に集まり、なにか話しているようだ。

その動きを見て、あたしたちも一旦集合していた。

表向きは、「いた?」「ううん」といった感じで友人探しの報告をしているように装い、小声で作戦の伝達という本当の目的を果たす。

「奴らが公園に入ってきたら、頃合いを見計らって持ち場についてね」

「うん、わかったのだ」

「了解」

それだけ伝えると、あたしたちは再び水萌の名前を呼びながら公園内の各所に散っていく。

やがて、奴らが公園の中へと入ってきた。

奴らは濃いグレーのスーツに身を包み、サングラスをかけていたり、帽子を深くかぶっていたりと、なかなか怪しい格好をしていた。

数は全部で六人だった。対するこっちは五人、隠れている水萌は戦力にならないから実質四人だし、相手は大人の男性ばかり。

圧倒的にあたしたちの不利は否めない。

でも、こちらには地の利があるのだ。しかも、こちらの標的としては誰かひとりでいい。

入ってきた奴らは、明らかに慌てた様子で公園内を探していた。

あたしはその中の、やけにトロそうなひとりに目をつける。服装もそいつだけ紺色だったからわかりやすい。

ターゲットはあいつにしよう。

散り散りになったみんなとすれ違う際に、紺色をターゲット、と素早く伝えた。

そのひと言でも、充分に伝わるだろう。

やがて、あたしたちは水萌を探すフリをしながら、それぞれの持ち場へと身を隠す。

奴らは水萌の捜索に集中していて、こちらにまで気が回っていないはずだ。

あたしと土柳はそれぞれ別の下側の土管に、フーミンと地花ちゃんを上側の土管に入った。

「む？ あいつら、どこに行った？」

男の声がすぐそばから聞こえた。

よし、今だ！

あたしはターゲットの男が滑り台の横を通った瞬間、土管の中から素早く右足を出し、そいつの足に引っかける。

「うあっ!?!」

奴はものの見事に転倒した。

思ったとおりとはいえ、ほんとにトロい。水萌にも匹敵するトロさかもしれない。

「それ、行くのだった!」

「ごめんなさいなのでごさいますっ!」

倒れたそいつの上に、上側の土管からフーミンと地花ちゃんが飛び下りて乗っかる。

「ぐえっ!」

ふたりとも小柄とはいえ、さすがに落下する速度分も加わるとそれなりの衝撃になったようで、奴はうめき声を上げていた。

「うりゃっ!」

「観念しろ、この!」

土柳とあたしも素早く土管から飛び出し、そいつを押さえつける。いくら大人の男性といっても、四人に取り押さえられている状態だ。ターゲットの男は声を上げながら抵抗するも、あたしたちをはね退けることはできなかった。

心配なのは、残った奴らだ。あいつらが全員集まってあたしたちをどうにかしようとするれば、きつと抵抗できずに捕まってしまう。だからこれは、賭けだった。そしてあたしたちは、賭けに勝った。

「くっ、俺はいいから散れっ！」

異変に気づいた奴らがこちらに向かってくるのを一喝したのは、押さえ込まれている当の本人だった。

一瞬躊躇するも、グレースーツの男たちは散り散りに公園から出ていく。

そして残った男は観念したのか、抵抗をやめてその場でぐったりと頂垂れていた。

「さて、これからどうするのだ？」

黙ったままあぐらをかいて座っている男を取り囲んで、あたしたちは相談していた。

隠れていた水萌も出てきて、一緒にその男を見下ろしている。

もう危険はないだろう、そう判断したのだ。

男は完全に観念したのか神妙にしてはいるものの、なんでもかんでもべらべらと喋ったりはしなかった。

「うーん、さすがにこのままここにいるのも問題あるかな。奴らが戻ってくるかもしれないし」

「それはないけどな」

男は憮然とした態度で吐き捨てる。

さつきから、こっちの質問には答えないものの、向こうからこうして口を挟んできたりはしていた。

この男、歳は二十代前半くらいだろうか。

サングラスを外させると、結構きりつとしてカッコいい顔立ちをしていた。

「そうねえ、そろそろ暗くなってくるし、とりあえず私の家にも行きましよう。叔父さんも叔母さんも遅いはずだし」

そう言っつて、水萌は率先して歩き出した。

でも、それはどうなの？

というか、見ず知らずの男を水萌の家に……？

そ……そんなのダメよ！

と、あたしは気が気ではなかったのだけど、当の本人は全然気にする素振りもなく、自分の案に満足顔の様子で歩き出していた。

笑顔の水萌に、あたしが意見できるはずもない。

土柳兄妹もフーミンも、その男の腕をしっかりとつかんで逃げられないようにしながら、水萌のあとを黙って歩いていった。

ふと、地花ちゃんが訝しげな表情を浮かべているのに気づく。

「どうしたの？ 地花ちゃん」

「……いえ、なんでもないのでございますよ」

そう言いながらも、彼女はやはり、なにか考え込んでいるようだ

つ
た。

「俺たちは、国の機密組織、SPの一員だ」

水萌の家に着くと、その男は静かな声で語り始めた。

「SPっていうと、セキュリティポリスってやつ？」

あたしの問いに、

「似たようなものではあるが、ちょっと違うな。俺たちの組織は『スマイルプロジェクト』という極秘機関だ」

男はそう答える。

「極秘機関ですのに喋ってしまったって、よいのでございますか？」
「状況的に仕方ないと判断した。それでも俺は、今回派遣されたグループのリーダーだからな」

地花ちゃんも疑問を口にしたけど、男はそれにも素直に答えてくれた。

「俺はアマサギ。コードネームだが、組織の性質上、本名は言えないことを了承してほしい」

「はい、わかりましたわあ。あっ、お茶を淹れましたので、どうぞあ」

にこ〜っと相変わらず笑顔を浮かべてアマサギと名乗った男に湯飲みを差し出す。

夕方とはいえまだ暑い気候、嫌がらせのつもりだろうか、と考えただけで、水萌がそんなことをするわけはなかった。熱いお茶は、続いてあたしたちの目の前にも置かれた。

「これは、ありがとう」

そう言って、ずずずとお茶をすする。

さすがに今の話を鵲呑みにしていいものかは怪しいところだけど、アマサギさんは今、かなり落ち着いて話しているように見えた。

実はやっぱりストーリーカーだったとしたら、とんでもない演技力ということになる。

それならばどこの劇団でもやっていけるだろうから、きっとストーリーカーなんてやっていないで練習に励むだろう。

「それで、そのSPがどうして水萌ちゃんをこそこそと隠れて見ていたのだ？」

フーミンが核心に迫る質問をする。

相変わらず口調はふざけている上に、水萌が出してくれたお菓子をバリバリと音を立てて食べながらではあったけど、至って真剣な眼差しをアマサギさんに向けていた。

「実は……」

そこで一瞬言いよどむアマサギさん。

ここまで話しておいて、今さらためらうことなんてあるのだろうか、とも思ったのだけだ。

その内容を聞けば、確かに言いよどみなくなる気持ちも理解できた。

「彼女……沢湖水萌は、原爆にも匹敵する威力の爆弾なんだ」

カチツ、カチツ、カチツ。

時計の秒針の音が響くほどの静けさ。

文字どおりの『爆弾発言』をした当のアマサギさんでさえも、バツが悪そうな表情を浮かべていた。

「いや、まあ、信じられないのも無理はないと思うが……」

明らかに焦りながら弁明するアマサギさん。

「こいつ、やっぱり怪しいのだ！ 警察に突き出したほうがよいのではないか？」

「わたくしも、それが正しい判断のように思いますのでございませす」

という正常な反応を示すフーミンと地花ちゃんに対し、

「そんなにいじめちゃ、だめだよぉ〜」

と相変わらず笑顔のままの水萌。

こんな怪しい相手に対して、しっかりとお茶のおかわりを注いであげていた。

あたしとしては、周りにはあまりあてにできないと考え、この人の

言うことがホントか嘘か、自分でしつかりと見極めようと慎重に成り行きを見守っていた。

……おや？ そういえばさっきから、土柳の奴が静かだな。

ふとそう思っただけ視線を向けてみると、なにやら土柳は顔を少し赤らめている。

「土柳、どうしたの？」

「だって、女の子の家にお邪魔するのなんて初めてだから……。しかも、沢湖さんの家だしさ……。」

……相変わらず、使えない奴だ。

でも、居間でこの反応ってことは、水萌の部屋に入ったらどうなってしまうのか。

いやまあ、このあたしがいる限り、そんなことは一生させないけども。

それはともかく。

今はアマサギさんのほうに神経を集中しなきゃ。

どう考えても信じられない話ではある。

水萌が原爆にも匹敵するほどの爆弾？　ありえないありえないありえない！

あたしのわずかばかりしかない理性でさえも、他に考えようもなく、そういう結論に達する。

でも、とりあえず聞くだけ聞いてやってもいいかもしれない。

警察に突き出すのは、それからでも遅くはないだろう。

「水萌が爆弾って、いったいどういうこと？」

あたしは話の先を促してみた。

フーミンたちは、一瞬驚いたような表情を見せていたけど、あたしの意図を察知してくれたのか、口を挟んだりはしなかった。

「どつて、そのままの意味だよ。実は、とある薬のせいだ、彼女の体には非常に強力な爆発性の物質が蓄えられてしまっている」
アマサギさんの話をまとめると、こういうことのようにだった。

水萌がまだ小さかった頃、とある薬品を投与された。それは認可された薬ではなかった。

水萌は生まれつき体が弱く、そのままでは衰弱死してしまうという状態にまでなっていた。
追い詰められていたのだ。

水萌が生き続けるためには薬を使っしかない。そう判断して、その薬は投与された。

その結果、水萌は無事、生き長らえることができた。
でも、副作用があったのだ。とても重大で危険な副作用が。

投与された薬品は、血液に乗って全身を駆け巡る。その過程で、血管から染み出した薬品の成分の一部が血管の外にそのまま溜まってしまう。

それは水萌の全身に及んでいた。

そしてその薬品の成分というのが、爆発性の物質だった。
ただし、衝撃などによって簡単に爆発してしまうわけではない。

泣いたり悲しんだり不安を感じたり、また怒りなども含めストレ

スになりうる負の感情を持つと、どんどんと爆発の危険が高まるのだという。

逆に、笑ったり楽しんだり、リラックスして心地よさを感じたり、といったストレスを軽減するような感情を持てば、爆発する危険性も軽減されていくらしい。

「つまり、彼女は……いや、彼女の笑顔は、いわば国家機密。国を挙げて護るべきものなのだ。そしてその役目を担っているのが、俺たちSPなんだよ」

アマサギさんは淡々とそう言いきった。

「さすがに四六時中彼女を拘束するわけにはいかない。だから俺たちSPは基本的に遠くから見守ることしかできないが、君たちは違う。彼女が負の感情に囚われないように、これからも彼女の友達として今までどおり接してほしい。彼女が爆発したら、とんでもない被害が出てしまうんだ。彼女が笑顔でいられるように、いつも一緒にいてあげてくれ」

誰も、声を出せなかった。

アマサギさんの言ったことは、にわかには信じられなかった。

でも……。

水萌が笑顔でいられるように、ずっと一緒にいる。

それは、爆発の話がなかったとしても、あたしには当然の行動原理だった。

初めて水萌に話しかけられたあの日から、ずっとそうやって生きてきたのだから。

これからだって、変わるわけがない。
たとえ彼女が本当に原爆並みの爆弾だったとしても。

「わかったわ」

あたしの答えに、水萌以外は驚きの表情を浮かべていた。
話した張本人であるアマサギさんでさえも。

水萌だけは、自分が爆弾なのだと言われたにもかかわらず、いつもどおりの笑顔をこぼしている。

「うふふ。あ……ちょっと失礼して、お手洗いに……」

そう言って立ち上がる水萌。

と、

ふらあゝ。

バランスを崩して倒れかかる彼女を、あたしは慌てて抱きとめる。

「ちょっと、水萌！ 大丈夫!？」

「うふふ、どうしたのかしらねえゝ、ちょっとめまいが……」

こんな感じだけど、水萌もやっぱり動揺しているんだ。

あたしはそんな水萌を強く抱きしめ、これからもずっとこの子を
護り続けていくことを改めて心に誓うのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3342y/>

スマイルプロジェクト ~その笑顔、国家機密につき~

2011年11月8日02時05分発行